



2010年10月25日
 【編集発行人：坂本 隆】
 発行：(財)日本国際協力システム
 〒162-0067
 東京都新宿区富久町10番5号
 新宿EASTビル
 Tel: 03-5369-6960
 Fax: 03-5369-6961
 E-mail: jics@jics.or.jp
 http://www.jics.or.jp

財団法人 日本国際協力システム
 Japan
 International
 Cooperation
 System

ジックス・レポート

JICS Report

JICSの実施事業を、毎回、テーマを絞りこんで紹介する広報誌。年4回(1・4・7・10月)お届けします。



▲photo: 上から ●臨時理事会で選任された仲谷新理事長(中央)と、佐々木前理事長(左端)
 ●再建が完了したパキスタン・バタグラム県中央病院の引渡し式
 ●「ダッカ市廃棄物管理低炭素化転換計画」で調達した、ごみ収集車

特集1

理事長交代

新理事長 仲谷 徹 就任あいさつ
 前理事長 佐々木 高久 退任あいさつ

2010年9月、JICSの理事長として、佐々木 高久に代わり、仲谷 徹が就任しました。前理事長である佐々木 高久の在任期間が長期に及んだため退任の意向が示されており、今後のJICSの在り方を検討した結果、組織体制を強化しサービスの質のさらなる向上を目指すこととなったのが、交代の経緯です。2010年4月より、一般から公募を行って選定手続きを進めていたが、このたび新理事長に仲谷 徹が選任されました。仲谷新理事長および佐々木前理事長より、皆様にごあいさつ申し上げます。

特集2

パキスタン地震復興支援
 (ノン・プロジェクト無償)

約4年半の歳月をかけ、すべての再建工事が完了

2005年10月にパキスタン北部を襲った大地震で被災した、教育・保健医療施設などの再建工事がすべて完了し、2010年8月、パキスタン政府に引渡されました。工事中に直面した数々の困難を乗り越えながら、JICS職員そして現地関係者が全力を注いだ支援事業の概要をお伝えします。

Topics

- 環境プログラム無償 — バングラデシュ
 ごみ収集車の維持管理技術の向上を目指して
 ワークショップ・工具・技術移転の有機的な調達

理事長交代の背景および経緯

JICSは、1989年の設立以来、関係各方面の皆様のおかげで、ほぼ順調に成長してまいりました。これまで経営陣については事業規模に見合うスリムな陣容とすべく、有給となる常勤理事は専務理事のみとし、理事長職は無給の非常勤理事として組織を運営してまいりました。佐々木前理事長においても、2004年4月1日から6年5カ月にわたり非常勤で理事長を務めておりました。

佐々木前理事長からは在任期間が長期にわたったこともあり、かねてより退任の意向が示されておりました。これを契機に、今後のJICSの在り方について検討を行ったところ、日本で唯一の公的な調達機関として、これまで20余年の間に積み上げた実績とノウハウを活かした「国際的な調達機関」を目指し、組織体制の強化を図るとともに、サービスの質の一層の向上に取り組むのにふさわしい体制とすべきとの結論に達しました。これを受け、財団経営陣の強化のため理事長を常勤化することとし、経営者としての経験を有する方を、広く一般から公募いたしました。

2010年4月、JICSホームページおよび新聞などに、理事長公募に関する採用情報を掲載して募集した後、外部有識者から成る選考委員の方々にご協力いただきつつ、選考手続きを進めてまいりました。その結果に基づき、2010年7月30日、JICS本部会議室において2010年度第1回臨時理事会を開催し、佐々木理事長の退任（同年8月31日付）に伴う後任の理事長が選任されました。

今後、JICSは新理事長のもと一丸となり、国際協力事業の適正かつ効率的な実施に向けた事業をより一層、推進してまいります。

役職	氏名	就任
理事長	仲谷 徹	2010年9月1日

新理事長選任までの流れ

- 2010年4月.....公募開始、応募者39名
 - 第1次書類審査（資格審査）で対象者が24名に
 - 第2次書類審査（外部有識者から成る選考委員会による）で対象者が6名に

◀ 理事長公募公示
日本経済新聞・朝日新聞に掲載

- 6月上旬.....面接
 - 選考の結果、仲谷 徹（なかに とおる）氏が後任の理事長として適任であると推薦される
- 6月22日.....2010年度第1回評議員会を開催、仲谷氏が理事に選任される
- 7月30日.....2010年度第1回臨時理事会を開催、仲谷氏が理事長に選任される



▲ 2010年度第1回臨時理事会



理事長 仲谷 徹

このたび、佐々木前理事長の後任として、財団法人日本国際協力システム（JICS）の理事長に就任いたしました、仲谷 徹と申します。開発途上国の健全な発展のために、日本の国際協力を微力ではありますが誇りをもって取り組み、貢献いたす所存です。

これまで37年間、民間企業に籍を置き、20年有余の海外生活を中近東・アフリカ・アジアにて事業経営に取り組みつつ送ってまいりました。この経験を通じ、開発途上国の健全な発展があって日本の発展も適うものであるとの思いを強く抱くようになりました。

政府開発援助（ODA）への国民・関係機関の方々の関心が年々高まり、より高いレベルでの、効率化された政府開発援助の実行が求められるなか、JICSの責任者としての重責を担うこととなり、非常に光栄であると同時に、身の引き締まる思いです。

移り変わりが激しい世界情勢のなか、これからの国際協力事業は国際社会からも評価を受ける質の高さだけでなく、その実行に際し、一層のスピード感としっかりとした対応ができる枠組みが求められており、JICSにおいても、期待される役割を着実に果たしてまいりたいと思います。

一方で、公益法人をとりまく環境も大きく変化しております。この変化のなかにあっても、公正・中立な立場を堅持し、国際協力事業をより適正かつ効率的に実施する一翼を担うことがJICSの社会的使命であることに、なんら変わりはありません。内部統制を強化しつつ、課題や変化への対応能力を一層高め、今後も着実な事業の実施に取り組み、日本で唯一の公的な調達機関としてのValueの向上に努めてまいります。さらには調達を通じ、国際機関などからも一層信頼される世界最高水準の開発援助組織の一員となることを目指し、今後も研鑽してまいります。

長年勤めた民間企業を離れ、初めて公益事業に取り組みることになり、緊張感を持ちつつ初心を忘れず、また皆様からご指導・ご鞭撻をいただきながら適切なJICSの舵取りができるよう取り組む所存ですので、よろしく願い申し上げます。



前理事長 佐々木 高久

2004年4月より理事長を務めてまいりましたが、このたび2010年8月31日をもって退任いたしました。在任の間、格別のご指導とご支援を賜り、改めて御礼申し上げます。

任期中は、イラク・アフガニスタン・インドネシア・スリランカ・パキスタンなどでの戦災・天災からの復興支援、現地業者を積極的に活用する新しい援助の創設など、日本のODAが大きな変貌を遂げた時期でありました。

JICSはその時々々の援助ニーズに柔軟に対応する形で、それまでの資機材の調達にとどまらず、援助資金の管理、施設建設に関する役務の調達、現場に軸足を置いた工程管理までを含めたプロジェクトの総合的なマネジメントへと業務範囲を拡大し、ODAの実施を支援してまいりました。

任期中には、インドネシア・スリランカ・パキスタン・カンボジアなど、事業を実施している現場を訪れる機会がありました。共通して感じたことは、国民性・商習慣・治安状況・技術レベルなど、それぞれ条件が異なる環境での臨機応変な現場対応の重要性、きめ細かく現地ニーズを把握できる体制強化の必要性でした。これらの課題に対処すべく、人材育成や実施体制の強化を進めてまいりましたが、解決すべき余地はまだ多く残されております。

より効率的・効果的なODAの実施が求められるなか、日本で唯一の公的な調達専門機関として、JICSが果たすべき役割は、その重要性を増すものと確信しております。

1989年設立のJICSも、在任中に設立20周年を迎えることができました。JICSは、本来業務を確実に実施していくことはもとより、自らのビジョンの実現、さらに公益法人としての社会的責任を十分に自覚し、一層の社会貢献活動への取り組みも含め、さまざまなアプローチで、その使命を果たすことを願っております。

今後も、JICS一丸となって業務にあたり、内外より一層の信頼を得、自立した組織として発展を遂げることを心からお祈りし、退任のごあいさつといたします。

特集2 パキスタン地震復興支援 (ノン・プロジェクト無償)

●約4年半の歳月をかけ、

JICSでは、2005年10月に発生したパキスタン北部の大地震で被災した教育・保健医療施設などの復興支援業務を実施してきましたが、このほど、すべての再建が完了し、パキスタン政府に引渡されました。現場における数多くの困難への対処も含め、再建工事の状況をお伝えします。



▲本プロジェクトで最大規模のバタグラム県中央病院が完成



▲パキスタンの気候は多様で、4～9月は、山岳地帯の北部は温暖だが南部・低地帯は40℃以上、逆に10～3月は、北部では氷点下となる。地震で大きな被害を受けたバタグラム県は北西部に位置する。



▲地震で完全に倒壊した診療所

教育・保健医療施設の大部分が被災

2005年10月8日、パキスタンの首都イスラマバード北東約90kmを震源とするマグニチュード7.6の大規模な地震が発生し、死者約7万3,000人、負傷者約12万人という甚大な被害が出ました。特に北西辺境州（現在はハイバル・パクトゥンクワ州）のバタグラム県では、教育・保健医療施設の9割が被災したことから、その再建が喫緊の課題となっていました。

パキスタン政府の要請を受け、日本政府は直ちに緊急援助物資の供与、国際緊急援助隊の派遣、12億8,400万円の緊急無償などの支援を決定・実施しました。さらに日本政府は2006年3月13日に40億円のノン・プロジェクト無償資金協力の実施を決定して、復興支援を行っています*。このノン・プロジェクト無償に関してJICSは同日にパキスタン国経済統計省と調達監理契約を締結し、被災した教育・保健医療・インフラ分野における施設の再建に携わってきました。

*2007年2月15日、口上書の交換により、債務救済無償資金協力未使用金約8.3億円がノン・プロジェクト無償資金協力(40億円)に追加された。

全教育施設で日本基準の耐震設計を採用

施設の施工期間中は、さまざまな困難に直面しました。土砂崩れで道路が寸断されて建設現場にアクセスできない事態は日常茶飯事で、大雪に見舞

すべての再建工事が完了

われ建設作業がストップしたり、治安面で困難が伴うこともありました。施設の再建は、地域の人々から感謝される一方で、地元の一部権利者の理解を得るのに苦労する場面もありました。また、土地の所有者が小学校建設に同意したにもかかわらず、学校のトイレ建設に対し、隣接する住民の理解が得られなかった際は、現地の自治体関係者などの協力も得ながら、何度も対話を重ね解決に努めました。

今回、再建された教育施設は、大震災の悲劇を繰り返さないよう、全施設が日本の基準による耐震設計(日本建築学会「建築工事標準仕様書」に基づく)を採用しています。2009年10月に完了したバタグラム男子短大の再建では、この耐震設計を取り入れつつも、費用をできるだけ抑えるため被災した建物の状況に合わせた復旧に努めました。例えば、それほど被害が大きくなかった学生寮は、強度調査を行ったうえで1階部分は取り壊さず耐震補強と改修工事を実施し、2階部分のみ軽量構造建築で再建しました。

効率的な先端設備を導入したバタグラム県中央病院

施設の多くは山間部に位置するため、JICS職員が恐怖を感じるほどの急な斜面を半分滑りながら降りないとたどり着けなかったり、車が通れない建設現場もありました。このような場所では、ロバなどの家畜あるいは作業員自らがレンガやセメント、鉄筋などの重い建設資機材を抱えて何百回も往復せざるを得ませんでした。

本プロジェクトで再建した最大の施設はベッド数130床を超えるバタグラム県中央病院です。地域医療の中核を担う同施設は、利用者の利便性や維持管理の容易さの観点から、スロープを設けたバリアフリー化、配管・配電設備の集中配置など、これまでパキスタンではあまり普及していなかった設備・方法を取り入れました。このため、建設過程で施工会社から「こんなに複雑な工事はできない」という声も上がりましたが、施工監理を行ったコンサルタントの技師たちが現場でねばり強く指導にあたり、パキスタン政府側関係者とJICSも一丸となり対処してきました。

本プロジェクトにより、山間部に診療所や第二次医療サービスを提供する地域保健センターが再建されたことで、多くの患者が山を越えずに通院できるようになりました。

災害後の瓦礫の撤去から始まった再建工事は、4年5カ月を経て2010年8月に全施設が完工し、パキスタン政府に引渡されました。最後の施設となったバティアン診療所が完成した際の引渡式は、関係者一同、決して平坦な道のりではなかった再建事業を振り返り、感慨深い式典となりました。



▲ 建築資機材をロバの背中に乗せて運ぶ



▲ 着々と工事が進むバタグラム高校



▲ バタグラム高校の引渡し式



▲ 再建された教室で笑顔を見せる子どもたち



▲ 最後の施設となったバティアン診療所の引渡し

環境プログラム無償—バングラデシュ

ごみ収集車の維持管理技術の向上を目指して

ワークショップ・工具・技術移転の有機的な調達

現在、バングラデシュの首都ダッカにおいて、環境プログラム無償の第1号案件である「ダッカ市廃棄物管理低炭素化転換計画」が進められています。本案件では、同市のごみ問題改善に必要な機材・役務を調達することになり、JICSは同市と調達代理契約を締結し、全体のマネジメントを実施しています。

この計画内容は、温室効果ガスの削減に資する圧縮天然ガス(CNG: Compressed Natural Gas)を燃料とする車種(45台)を含むごみ収集車100台の調達、収集車の維持管理などを行うワークショップの建設、3名の専門家派遣(環境教育・車両の維持管理・CNG取扱い)です。

2010年8月、ワークショップの建設工事が終了しました。建設にあつ

ては、敷地内の既存の木を残し、建物の構造については極力、自然光を採り入れられるような形にするなど、環境プログラム無償であることを意識した設計としました。また、車両整備に必要な工具なども併せて納入し、引渡し後、ダッカ市側が直ちに実務に入れるよう配慮した計画内容となっています。翌9月、これらの工具などが到着し、納品・検査作業が完了し、ダッカ市役所へ正式にワークショップが引渡されます。

3人の専門家は、同月までにそのほとんどの作業を完了しました。車両の修理・維持管理については、車両整備士やごみ収集車の運転手に対し、技術を繰り返し教え、離任時には現地語であるベンガル語のマニュアルも残してきました。また、環境教育

については、ダッカ市民の環境問題に対する意識を高めることを目的に、地球温暖化防止に関するステッカーをコンテストで選定したり、温暖化と天然ガス車両の関係が漫画でわかりやすく表現されたポスター作成などを行いました。

当初、予定していた計画内容がほぼ達成されつつあり、現在、最終段階に差し掛かっています。今後は、今回、調達した収集車やワークショップが効果的かつ継続的に活用され、その効果が持続する取組みを引き続き検討していきます。



▲ 完成したワークショップ

NGO 紹介

このコーナーでは、これまでにJICSが支援した団体より、事業実施状況について報告していただきます。

女性のおしゃべりパワーで、津波移転地区の衛生環境を高める

【(特活)アプカス】 APCAS: Action for Peace, Capability and Sustainability

2004年12月に発生した、スマトラ沖大津波による大災害。当会は、この大災害によるスリランカの被災者を緊急支援する目的で結成され、歩み始めました。言わば、我々の活動の原点となる出来事です。

「被災から3年以上が経過し、浜辺に暮らしていた人々が内陸部の移転地区に移り、新たなコミュニティを形成していく状況で、我々のような小さなNGOにできることは何だろうか?」その問いを胸に住民へのヒアリングを重ねていくと、生ごみ投棄や、そこから発生する悪臭・ハエなどの衛生環境の問題が、明らかになってきました。

このようななか、JICSから支援を受け、2009年2月からスリランカ南部州マータラ県のミリッサ津波移転住宅地で、「ごみの減量」と「家庭菜園」をキーワードにプロジェクトを始動させました。

今回の主役は、一家の台所を預かる女性の皆さん。同年4月には、オクラ・ナス・ピーマン・トマトなど、日本でもおなじみの野菜

の種を配布し、家庭菜園がスタート。併せて、設置したコンポスト(生ごみから堆肥をつくる装置)でつくった有機肥料を上手に使うために、女性スタッフが定期的に各世帯を訪問。紅茶片手の井戸端会議をあちらこちらの庭で不定期に開催し、女性のおしゃべりパワー(!!)を最大限に利用して、アイデアの共有や栽培技術の向上とともに地域のつながりを深めていきました。また、ごみ分別では子どもたちが活躍。キャラクターの絵が描かれた分別用の麻袋にごみを捨てる役割を果たしてくれました。女性・子どものやる気に押された(!?)男性たちも共有地の清掃などに参加し、コミュニティ全体の衛生環境を高めるためにできることは何かをみんなでも共に考え、実行に移すことができました。

プロジェクト終了後の今でも、たまに現地に住みませんが、多くの住民の方が家庭菜園を続けています。その光景を見ると、大津波が少しだけ昔に感じる自分たちに気付くのです。



▲ 女性スタッフが各世帯を訪問

(特活)アプカス

「対話・自立・持続」をキーワードにすべての人々が、共に歩むことができる社会の実現を目指し、スリランカで災害復興支援、子ども教育支援、環境保全、持続可能な農業の普及、栄養改善、生計向上などの活動を現地NGOと共にしています。http://www.apcas.jp.org/

JICS NGO 支援事業: 2008年度

対象国: スリランカ
支援事業の内容: スマトラ沖大地震津波被害による住居環境の変化で発生した、衛生環境に関する問題の改善を目指す。具体的には、コンポストを設置し、家庭菜園に利用することで生ごみの削減を図る。

ワールドカップ開催に沸いた冬のレント

若村 高志

レント・プロジェクトオフィス

アフリカ南部の国々のなかでも比較的、日本人に知られていないと思われるレント王国*は、南アフリカ共和国に周囲を囲まれ、日本の九州の7割程の国土に約200万人の人口を有する独立国です。標高1,500m以上の高い山脈が多いことから「山の王国 (Mountain Kingdom)」「天空の王国 (Kingdom in the Sky)」などと呼ばれています。標高が高いため気温が低く、レント人は伝統衣装として毛布を羽織っているのが特徴です。ダイヤモンドなどの鉱物資源が産出され、豊富な水資源は南アフリカに輸出されています。

レントには四季があり、2010年に日本での猛暑が伝えられていた頃、南半球の



▲ レント人の伝統衣装

レントには厳しい冬が到来していました。1年のうち300日は晴天になるといわれ、6月からの冬季は空気が乾燥し、車の乗降時の静電気に悩まされます。山間部では雪が積もり、アフリカで唯一といわれるスキー場は南アフリカ人向けのちょっとしたリゾートスポットになっています。9月になると春の訪れを知らせる強い風が吹き、桃や梅の花が咲き始め、日本の春の風景が思い出されます。

南アフリカで開催された2010FIFAワールドカップの期間中は、同国に隣接している、ここレントでも大変、盛り上がりました。日本対カメルーン戦の試合会場となったブルームフォンテンはレントの首都マセルから車で1時間半の距離で、日



▲ レントの雪景色 (2009年8月5日、モコトロンゴ県)

本からの観戦客がマセルに宿泊することもありました。

コミュニティ開発支援のプロジェクトオフィスは、マセルにある教育訓練省の別館内に居を構え、7校の学校建設プロジェクトのマネジメントを行っています。最も遠いプロジェクトサイトはマセルから車で5時間離れた山間部にあり、どこまでも続く青い空と山に囲まれながらサイトでの作業確認を行っています。学校建設に対する地域住民やレント政府の期待は大きく、案件終了を間近に控え、日本の援助で建てられた新設校で学んだ生徒がどのように成長していくのか、楽しみです。

※レントは「ント語を話す人々」という意味



▲ JICS記念品の贈呈 筆者と校長たち (2010年3月5日、マセル、引渡し式)

リ
ー
エ
ッ
シ
ー

JICSの仕事といえば「国際協力」。私は業務第二部の機材第一課に所属して主に食糧援助に携っており、出張先は海外がメインですが、国内出張を伴う業務もあります。今回は、その様子を紹介したいと思います。

先日、ベナン共和国向け援助米の船積み立ち会いのため、高松港に出張しました。船積み立ち会いでは通常、援助米が船に積み込まれる様子を直接確認するほか、物流会社・倉庫会社・品質検査機関の方ともお会いして、いろいろとお話を伺います。倉庫から出庫された後に行われる検査や船への積み込みを、実際の作業の流れに沿って確認します。今回は船のデッ

キに上がって、船内での作業の様子も確認しました。

日頃は被援助国政府やプロジェクトに関連する組織関係者との連絡や書類作成などの業務がメインになるため、調達に携っているとはいえ、援助米が実際にどのような手続きを経て輸送されるのかを具体的にイメージするのが難しい部分もあります。しかし、実際に現場を見て、関係者へ行って話を伺うことで知識も一層深まり、業務に対するモチベーションも上がります。例えば梱包に関してですが、「アメリカ米には、バラのものとスリングバッグに入っているものがある」という知識についても、実際に自分の目で見ることで、より

明確に理解できます。まさに、「百聞は一見に如かず」です。

翌週には、別の案件の船積みの立ち会いのため、小倉港にも行ってきました。行く先々で、それぞれの港の違いや、船の違い、積み込み方法の違いなども確認でき、ますます船積み立ち会いの奥深さにハマってしまうのでした。



▲ 袋詰め米が42袋入った、日の丸付スリングバッグ

国内出張で船積み立ち会いにハマる

最上 晶代

業務第二部 機材第一課

専務理事交代

2010年7月30日、当財団において、2010年度第1回臨時理事会が開催され、櫻田 幸久専務理事の退任に伴い、以下のとおり後任の専務理事が選任されました。

櫻田前専務理事は、2004年9月から5年11カ月にわたり、JICSを支えてまいりました。

役職	氏名	就任
専務理事	坂本 隆	2010年7月31日

● 就任あいさつ



専務理事 坂本 隆

櫻田前専務理事の後任として、2010年7月31日付で専務理事に就任いたしました。よろしくお願いいたします。

私は1976年に国際協力事業団(独立行政法人 国際協力機構[JICA]の前身)に入団以来、農林水産分野の技術協力プロジェクトや、財務・企画など管理部門の業務を担当いたしました。この間、タイ・バングラデシュ・インドネシアの現場において技術協力や無償資金協力を携ってまいりました。

2010年7月まで、JICAインドネシア事務所長として3年3カ月の間、対インドネシアODAの最前線に身を置いてまいりましたが、このたび縁あって、JICSの専務理事として、引き続き国際協力の現場で仕事ができる機会をいただきましたことを、大変名誉に感じております。

インドネシアはわが国同様、地震および洪水に直面している自然災害多発国であり、特に地震対応では、JICSはアチェ・ジョグジャカルタにおける緊急支援および復興事業支援においてインドネシア政府の代理人として重要な役割を果たし、インドネシア政府からも高い評価を受けていると承知しております。

皆様のご支援とご協力のもと、JICSが設立されて20年以上が経過いたしました。この間、JICSは国際協力の現場において多くの経験を重ねてまいりましたが、ODAのニーズの変化に伴い、物資の調達業務からアフガニスタン・イラクの復興支援や、平和構築支援、さらにはコミュニティ開発支援など新しいタイプの事業にチャレンジしております。ODAや公益法人を取り巻く環境が厳しいなか、これからも皆様のご指導を得つつ、専務理事として日本のODAおよび受益者のために、職員と共に一丸となって努力してまいります。

関係各位におかれましては、今後とも一層のご支援とご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

● 退任あいさつ



前専務理事 櫻田 幸久

2004年9月より、専務理事を務めてまいりましたが、2010年7月30日をもって退任いたしました。この間、多くの方々にJICSの活動をさまざまな形で支えていただき、心から感謝申し上げます。

就任当時は、機材調達に軸足を置いた業務から、イラク・アフガニスタンの復興支援に関連し施工案件へのチャレンジを始めた時期でした。2004年の12月にはスマトラ沖大地震・インド洋津波が発生し、それにより被災した地域への大型支援が開始されました。これらの案件は、被災直後あるいは復興過程に特有の混乱が顕著ななか、厳しい治安情勢、時間的制約、さらには現地業者の能力不足など、さまざまな制約要因もあり、予期せぬ事態や困難が連続するなかでの取組みとなりました。

特に津波案件は、大規模な施設建設に係る全体のマネジメントが求められ、さらに現地リソースも活用した点で、それまでの無償資金協力では見られない新しいチャレンジでもありました。この業務は複雑かつ困難を極めましたが、ハードな経験やそこで蓄積できたノウハウを基に、2006年に創設されたコミュニティ開発支援無償や防災・災害復興支援無償、2008年に創設された環境プログラム無償における調達代理業務の受注・拡大につながれたと捉えております。

このような業務環境の激しい変化に追いつけるよう、組織として切磋琢磨を継続すべく、調達業務の効率的な実施、業務品質の保持・向上や契約などコンプライアンスの取組み強化などを目的としつつ、組織改編や人材育成にも取り組んでおります。また、当財団の大きな目標である「国際的な調達機関」となるために、国際機関案件の受託で多少なりとも実績を積めたことは、今後のJICSの飛躍にあたり、ひとつの契機になり得るものと考えております。

一方で、JICSが組織として学び成長・向上する余地はまだ多く、真に「国際的な調達機関」として確立するためにも、取り組むべき課題はたくさんあります。2009年に設立20周年を迎えましたが、人間でいえば成人式を迎えたばかりの時期にあたります。これからの努力と研鑽により、関係者の皆様が納得できる価値を提供し、求められている役割・機能を全うしていくことで、真に社会に貢献し、認められるものと信じております。

まだまだ組織としては発展途上にありますが、今後も皆様のご指導・ご支援を仰ぎつつ、時には叱咤激励を頂戴しつつ、世界に通用する調達専門機関として飛躍していくことを祈念しております。

事務局長交代

2010年9月30日をもって、大島 義也事務局長が退任し、後任の事務局長として同年10月1日付にて江塚 利幸新事務局長が着任いたしました。

役職	氏名	就任
事務局長	江塚 利幸	2010年10月1日

● 就任あいさつ



事務局長 江塚 利幸

大島前事務局長の後任として、2010年10月1日付で事務局長に就任いたしました。新理事長の下、新専務理事を支えながら、職員と共に、新生JICSを創っていく所存であります。

私は1985年に国際協力事業団(独立行政法人 国際協力機構[JICA]の前身)に入団以来、国内では主に調達部、無償資金協力部、中南米部などの部署で業務を行ってまいりました。また、アルゼンチン事務所・チリ事務所・ボリビア事務所へも赴任し、ODAの現場でもさまざまな経験を積んでまいりました。

これまで業務でJICSと関わったことがありますが、私がJICAで無償資金協力を携わっておりました10年ほど前と比較すると、JICSの業務の拡大は目を見張るものがあります。特にここ数年、スマトラ沖大地震・インド洋津波被害に対する支援事業、アフガニスタン復興支援事業などの経験を踏まえて、調達代理業務は、施設案件を含めて拡大を続けております。これもひとえに皆様のご支援とご協力あつてのものと考えております。

JICSは創設から21年が経過し、創成期・成長期を経て第3期に入りました。この第3期は、これまで築いてきた組織の基盤をベースとして、さらに業務の質を向上させると同時に、JICSを取り巻く環境を的確に把握し、時代の要請に対応できる調達専門機関を目指してまいります。

ODAの最前線で活動するJICSの一員として、努力してまいり所存ですので、今後ともご支援とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

● 退任あいさつ



前事務局長 大島 義也

2007年4月より事務局長を務めてまいりましたが、このたび2010年9月30日をもって退任いたしました。在任中は多くの皆様よりご支援、ご協力をいただき、改めて御礼申し上げます。

着任時は、イラク、アフガニスタンの復興支援、スマトラ沖大地震・インド洋津波災害への支援が継続されている時期でした。これらの案件でJICSは援助のフロントランナーとして資機材の調達から被災施設の復旧など施工案件に係る役務の調達、さらに案件の進捗監理などを担当しました。JICSにとってはそれまで経験のなかった業務であり、戸惑いや困難の連続でしたが、職員一丸となり、この難局を乗り越え目に見える成果を出したことは評価に値するものと確信しております。業務の実施にあたっては緊張の連続だったと思われませんが、JICS全体が「この難局を乗り越えるんだ」という強い意志でまとまっていたと記憶しております。

JICSにとって、この津波関連の業務を通じて得たものは大きな財産および自信につながっているものと考えております。この経験が、新規の無償資金協力における調達代理機関としての受注につながり、これら業務の実施において有形・無形さまざまな形で「経験・教訓」が現在に引き継がれていると考えております。

施設建設型の業務は、物品調達型の業務とともにJICS「二本柱」として位置付けられるまでになりました。従来の物品調達型の業務は実施方法がある程度、確立されておりますが、施設建設型は実施方法や監理手法が基本的に異なる部分が多く、今後も不断の見直しや組織としてノウハウの蓄積に努めることが何より必要です。さらに、実施の環境、商習慣・治安状況などがさまざまなため、対象国ごとに業務遂行上の阻害要因やそのほかの特殊要因などを把握・分析し日々の業務に常にフィードバックしていただきたいと考えております。物品調達型、施設建設型を問わずJICSとして業務品質の確保・維持・向上に取り組んでいただきたいと考えております。

また、クライアントからの「信頼」「信用」の確保が最も重要であることは言を俟たないと思います。「信頼」「信用」を確保することは並大抵なことではありませんが、それを失うことはいとも簡単なことです。今後は、組織の内部統制機能を一層高め、コンプライアンスの取組みを強化し、リスク管理を適切に行うことが組織としての責任であると考えます。JICSは2009年に、創立20周年を迎えましたが、来るべき25周年、30周年に向け内外の関係者の皆様より認められる組織を目指し、悲願であります「国際的な調達機関」に飛躍することを祈念しております。

プロジェクト支援事業の実施

JICSは、その目的である「一層質の高い国際協力の推進」を実現するための活動のひとつとして、2009年度より、新たな社会活動である「プロジェクト支援事業」を開始しました。これは、JICSが調達代理業務を行ったプロジェクトによって建設された施設や、資機材が納入された組織などを対象に、それらの施設・組織の今後の活動の促進の一助となるよう、記念品などを贈るものです。

2010年9月23日、エチオピア連邦民主共和国に対するノン・プロジェクト無償によって建設した学校の引渡し式が開催され、その式典の最後に、当支援事業として、図書室に配備する本を贈呈しました。



▲学校の貴重な財産となる本の贈呈

東京と名古屋で国際協力イベントに出展

JICSは、2010年10月2～3日に東京・日比谷公園で開催された「グローバルフェスタ JAPAN 2010」、および同月23～24日に名古屋・栄で開催された「ワールド・コラボ・フェスタ 2010」に出展しました。

「グローバルフェスタ JAPAN 2010」では、JICSの位置付けと役割、調達の流れ、および2009年度中の事業実績について、図や写真で紹介したパネルを展示しました。また、2009年に引き続き「JICS職員のお仕事説明会」を開催し、日ごろ担当している業務内容や仕事を通して気付いたこと、感じることなどを若手職員が自分の言葉で説明しました。

今回が初の出展となった「ワールド・コラボ・フェスタ 2010」では、パネル展示を中心にJICSがどのような組織で何をしているのかをわかりやすくお伝えすることを目指しました。

両イベントにおいてJICSブースにご来訪の皆様、アンケートにご協力いただいた皆様、本当にありがとうございました。



▲グローバルフェスタ JAPAN 2010における「JICS職員のお仕事説明会」

お知らせ

■「日本国際協力システム 年報 2009」発行

JICSでは、2010年9月10日に「日本国際協力システム 年報 2009」日本語版を発行しました。本書では、2009年度に実施した事業について、写真や図を多用してわかりやすく説明しています。特集「今、JICSに求められる役割と機能」では、JICSが行う調達代理業務を詳しく説明するとともに、2009年度において事業の大きな柱となった「コミュニティ開発支援無償」「環境プログラム無償」について紹介しています。

この特集を含む2009年度の活動を紹介する第1部に加えて、第2部では事業実績、さらに参考資料として財務諸表・寄附行為などの情報公開資料も掲載しています。

本書のPDFデータは、JICSのウェブサイト (<http://www.jics.or.jp/soshiki/publish.html>) にも掲載していますので、ぜひご覧ください。



▲年報 2009の表紙

■パンフレット「JICS INFO-PACK」を大幅に改訂

JICSの業務拡充に伴い、組織・事業の概要に係る「JICS INFO-PACK」を大幅に改訂し、調達の説明を充実させるとともに、スキーム別・国別実績を把握しやすい構成へ変更しました。

また、2009年度より自主事業として「プロジェクト支援事業」を開始（左記「JICSの動き」を参照）したことを受け、新たにJICSが行う社会活動についてとりまとめたシートを作成しました。

これらのシートは、JICSのウェブサイト (<http://www.jics.or.jp/soshiki/publish.html>) においてもご覧いただけます。



▲社会活動シートの表紙

■「国際協力キャリアフェア 2010」への出展

JICSは、2010年11月13日に 新宿サンスカイルーム（東京都新宿区）で開催される「国際協力キャリアフェア 2010」への出展を予定しています。このイベントは、国際協力業界への就職・転職を考えている方を対象としたもので、JICSは2004年度以来、毎年出展しています。今年も、さまざまな経験を積んだJICS職員が直接、業務内容について説明するほか、JICSが求める人材や職場環境まで、皆様のご質問にできる限りお答えします。国際協力分野への進路をお考えの方は、ぜひ、お越しください。



▲2009年開催時のJICSブース